

フリウリ語の使用の歴史について

山本真司（東京外国語大学）

本発表の趣旨

わが国でも、フリウリ語に関して、いろいろなことがかかれるようになった。

にもかかわらず、そこには、必ずしも正確ではない記述や、誤解ともとも思えるような記述も見られる。

今回は、その一部を取り上げて、検討する。

近年の社会的変化

- ・1990年代の後半あたりから、フリウリ語の社会的状況は大きく変わってきた。
- ・特にイタリア共和国とりわけフリウリ地方における言語的マイノリティーに関する法制度の少なからぬ変化による。
- ・したがって、少し古い日付の資料では、現在のフリウリ語の状況を十分に考慮していない恐れがある。

フリウリ語に関する誤解？

- ・にもかかわわらず、いまだに見られるフリウリ語に関する誤解
- ・最新の知識の欠如だけでなく、フリウリの文化的伝統・歴史的常識に関する、理解の欠如も。
- ・例えば、そのような誤解の一部は、フリウリ語がレトロロマンス諸語の1つとされ、なおかつこの概念が、十分に用心深いとは言えない仕方で用いられることが起きていることによると思われる。

レト・ロマンス語による文学

レト・ロマンス語の文学先品 (町田 2011, p.81)

「スイスとイタリア境界部に分布する言語であったため、世界に誇るべき文学作品は書かれていない。ただ、公用語としての地位も獲得し、レト・ロマンス諸語の標準語を形成する基礎としての目論見もあったロマンシュ語では、中世以来いくつかの文学作品が書かれている。」

以下、このパラグラフの終わりまで数行、ロマンシュ語の話に終始。

パゾリーニはどうか？

- ・ 20世紀のフリウリ語文学史の中で必ず取り上げられる人物の一人
- ・ 「…アルベルト・モラヴィアはその死を悼んで Il maggior poeta italiano di questa seconda meta' del secolo という表現を用いた … (中略) … パゾリーニが20世紀のイタリアを代表する詩人の一人であることは、衆目の一致するところである。」 (四方田 2011, ii、一部変更)
- ・ パゾリーニがもっぱらフリウリ語で書き続けたというわけではないのは、知られている通り。「イタリア語で書いた最大の詩人」(上記の il maggior poeta italiano di questa seconda meta' del secolo の四方田訳)。
- ・ だがフリウリ語の詩人としての業績はとるに足りないものなのだろうか。

パゾリーニはフリウリ語で何をしたのか

「…とはいえ、彼はあえてフリウリ語を詩作の際に選択し、文学言語としてはイタリア語と比較してはるかに浅い歴史しか持たない言語を駆使して、マラルメたらんことを宣言した」(四方田 viii)

歴史が「浅い」とはどういう意味か？「短い」という意味か。

書記言語としてのフリウリ語

「この時点でフリウリ語の表記に少なからぬ変化がみられることは、この言語のエクリチュールがまだ十分に規範化されておらず、パゾリーニ本人のフリウリ語観にも揺るぎがあったことを示している」(四方田 x)

「十分に規範化されておらず」とはどういうことか。フリウリ語が書き言葉として使われるようになってからの歴史が、まだ短い、ということなのか。

パゾリーニが考案した言語？

「彼は貧しい農民が日常的に用いる、さまざまに地域差のあるフリウリ語の諸要素を統合し、アクセント記号を駆使して独自の表記法を考案した上で、エクリチュールにおいてのみ可能であるフリウリ語、地上には存在しないフリウリ語を「考案」して見せたのである。」(四方田 viii)

パゾリーニ以前には、フリウリ語には、「書き言葉」は存在しなかったということか？

既に存在した辞書

「おそらく処女作『カザルサ詩篇』は、フリウリ語の辞書を傍らにおいて執筆されたものと推測できる。」(四方田 viii)

辞書が既に存在した、利用できた。(Pirona, Nuovo Pirona)



「文学言語としてはイタリア語と比較してはるかに浅い歴史しか持たない」「この言語のエクリチュールがまだ十分に規範化されておらず」というのとは矛盾しないのか？

フリウリ語の文書—どういう意味で？

- ・書きあらわされるようになったのは、13世紀以降「フリウランは、最古の文書は、13世紀終わりに書かれている。(小林 p.26)」

- ・ただし、どのような文書かが問題

例えば、次のような用途にも用いられるようになったのは、最近のこと。

道路や住所、役所などのオフィスの表示

法律や、公共の機関が作り、公示・配布する文書

学校教育及びそれに使う教材

学術論文(自然科学)

新しくて古い歴史

- ・ 公式の正書法が出来上がったのは、1980年代から1990年代
Lamuela の標準化表記法をもとにして、政令で公布したものの。

- ・ それ以前には、フリウリ語は書かれなかったということではない。
(書記法のデファクト・スタンダードがなかったわけでもない)

Vecchio Pirona → Nuovo Pirona (SFF) → SFF書法 (多くの人が使用)
↑ Marchetti による修正 など

- ・ 戦後、文学運動も盛んに → 文学テキストも多く生み出される

連続した書き言葉の歴史

- ・ 実は、書き言葉としてのフリウリ語の使用はずっと古い
- ・ 初期 (11世紀) の記録は断片的な単語、13世紀末には文学テキストが (2編のバラード *Piruç gno doç inculturît / Bielo dumnlo di valôr*)
- ・ それ以降、連綿と、現代にいたるまで、フリウリ語で文学作品が書かれ続けられる。それに加えて：
 - 一般信徒向けの文書：要理教育及びそのための教材 (カテキスムス)
 - 1700年代には、フリウリ語の使用が普通になっていく。
- ・ 19世紀には、コルポルターージュの文学 (almanac, lunari, strolic) が繁栄

方言-共通語-標準語

- ・ 顕著な方言分化が認められる（相互理解の妨げになることは少ない）：タリャメント側を境にして「川のこちら側 / あちら側」 di ca da l'aghe / di la' da l'aghe
- ・ 標準語が定められるのは、20世紀末から21世紀、正書法の制定に伴って。
- ・ それ以前から、デファクトスタンダードともいえる、共通語があった（コイナー）。標準語の制定も、このコイナーに従ってなされた。
- ・ 文学的な伝統で優勢な変種：中部方言とゴリツィア方言。このうち、コイナーの元となったのは、中部方言、特に 県庁所在地 ウディネの（かつての）方言（Vecchio Pirona 以降辞書もこれを重視） - 政治・行政の中心地、人口の多さ、比較的均質的

西部方言とパゾリーニ

- ・それに対して、西部方言は、伝統的には、文学に使われることはほとんどなかった。

- ・パゾリーニのフリウリ語：西部方言を志向している：

「ここに収められた詩篇のフリウリ語は純粹なものではなく、タリャメント川の右側の岸のこの郷で話されている、ヴェネト方言が甘やかに漬け込まれたものである」(Poesie a Casarsa に付された注)

[四方田 ix の訳を一部修正] *原文の意味が伝わらないため。

- ・第二次世界大戦後、文学運動に伴い、コイナーと並んで、さまざまな方言(川のどちら側かを問わず)でも、韻文・散文が書かれるようになった。

パゾリーニのフリウリ語

パゾリーニのフリウリ語

- ・ その意図にもかかわらず、初版ではコイナーの影響が強い。
- ・ 時代が下るにつれ、西部方言の使用が多くなる。
後に再出版するときに、初期の作品も、西部方言の特徴をもった言葉使いに書き換える。(Rizzolatti 1986)
- ・ 1977年に SFFの Strolc Furlan に載せられた12編の詩は、すっかりカザルサ風の西部方言である。

まとめ

- ・フリウリ語には中世末期から現代まで続く、文学の伝統がある。ゆえに、フリウリ語で書くという行為は、別に、パゾリーニが創始者ではない。
- ・ただし、西部方言で書くということを通常のこととして行うようになったのは、おそらく、彼が初めてである。
- ・彼がフリウリ語の書き言葉をゼロから作り出したというより、彼の時代にすでに存在していたようなフリウリ語の書き言葉との対決から始めたというべきである。
- ・パゾリーニを、新しい書き言葉の創始者であるとみなすのは、フリウリ語全体に関してではなく、西部方言の文学に関しては、あてはまる。

参照文献 (主なもののみ)

Agjenzie regjonâl pe lenghe furlane (Arlef), *La grafie uficiâl de lenghe furlane / La grafia ufficiale della lingua friulana / The official spelling of the Friulian language / La grafía oficial de la lengua friulan*, Regione autonoma Friuli Venezia Giulia, 2017

Paola Benincà / Laura Vanelli, *Linguistica Friulana*, Unipress, 2005

William Cisilino (a cura di), *Friulano lingua viva*. La comunità linguistica friulana, Provincia di Udine, 2006

Giuseppe Francescato / Fulvio Salimbeni, *Storia, lingua e società in Friuli*, Casamassima, Udine, 1976

Giuseppe Francescato, *Dialettologia friulana*, Udine, Società filologica friulana, 1966

Giovanni Frau, *Friuli*, Profilo dei dialetti italiani ; 6, Pisa, Pacini editore, 1984

Sabine Heinemann and Luca Melchior, *Manuale di linguistica romanza*, De Gruyter, 2015

Giuseppe Marchetti, *Lineamenti di grammatica friulana*, Udine, Società Filologica Friulana, 2a edizione, 1967

Osservatori Regjonâl de Lenghe e de Culture Furlanis, *La grafie uficiâl de lenghe furlane*, 2002, <http://www.friul.net/lenghe/Grafie%20OLF%20-%202002.pdf>

参照文献 (続き)

Rienzo Pellegrini, *Tra lingua e letteratura. Per una storia degli usi scritti del friulano*, Casamassima, Tavagnacco (UD), 1987

Giulio Andrea Pirona / Ercole Carletti / Giov. Batt. Corgnali, *Il Nuovo Pirona. Vocabolario friulano*, 2° edizione, con Aggiunte e correzioni riordinate da Giovanni Frau, Udine, Società filologica friulana, 1992

Piera Rizzolatti, *Di ca da l'aga. Itinerari linguistici nel Friuli occidentale*, Edizioni Concordia Sette, Pordenone, 1996

Piera Rizzolatti, *Pasolini e i dialetti del Friuli occidentale*, in «Diverse lingue», 1 (febbraio 1986), 27-38,

Piera Rizzolatti, *Elementi di linguistica friulana*, Società Filologica Friulana, 1981

Federico Vicario, *Lezioni di linguistica friulana*, FORUM (Editrice universitaria udinese srl.) / Provincia di Udine, 2005

Federico Vicario, *Lineaments di leteradure furlane*, FORUM, Udine, 2013

参照文献（続き）

「Poesie di Pier Paolo Pasolini パゾリーニ詩集」四方田犬彦訳 みすず書房
2011年

町田健「ロマンス語入門」三省堂 2011年

小林標「ロマンスという言葉 — フランス語は、スペイン語は。イタリア語は、
いかにして生まれたか —」大阪公立大学共同出版会 2019年

菅田茂昭「ロマンス言語学概論」早稲田大学出版部 2019年